「会員＆役員だより」 2023 年 5 月号

Chat GPT

AI の急速な進化で、対話型の AI として、Chat GPT なる新しいツールが登場して世の中を騒がせています。会員の皆様も一度は試されたことでしょう。ご感想は如何でしょうか？ご意見はいろいろありそうですので、LRRI 内で、Chat GPT 談義のようなものをやってみてはどうでしょうか？

筆者も何度か試してみましたが、“筆者のような年寄りがやたらに使うと、認知症やフレイルを加速するので、よく考えて使おう”というのが現在のころの結論です。Chat GPT のような便利な機器に頼ると、勢い、思考することと記述する機会が少なくなってきます。このことが老人（あるいは、高齢者）の認知症やフレイルを加速する一因になる、というのが筆者の勝手な結論です。ということで、今のところは、やたらにこれに頼らないように心がけています。答えがたちどころに帰ってくる点では、不思議な快感に襲われますので、麻薬のようなものだ（もっとも麻薬を使用した経験はないのですが）、と思って注意しています。

Chat GPT は便利ですが、さらに注意すべきことがあります。例えば、“低炭素社会へ向けて地域の企業ができることは何ですか？”と問いかけてみますと、きちんと整理された答えが返ってきましたが、よく読んでみますと、何も新しいことはなく、はっと気が付くこともありません。ですから、出てきたものを自分の目的に沿って整理し、そこに自分の考えを追記することには役立つかもしれませんが、筆者は余りやりたくありません。自分が整理したものを確認するために、あるいは、検証のために、参照することはあるかもしれません。

Chat GPT に頼るときに、とりわけ、研究者が留意しなければならないのは、記述されたものがどのようなリソース（参照、参考、あるいは、引用したもの）に基づいているのかという点です。Chat GPT の回答にはこれが記述されませんので、参照元が不明なのにやたらに出てきたものを使っていますと、盗作など“研究不正”に問われる怖れがあります。これは研究者にとっては致命傷になります。名著「研究不正」（中公新書、2016）を書かれた黒木登志夫先生がどのようにお考えなのかをお聞きしたいものです。

やや悲観的なことばかり書き連ねましたが、面白いエピソードもあります。３月号で紹介しました NHK ラジオ番組「飛ぶ教室」のなかで、劇作家・平田オリザと高橋源一郎の対談（4 月 7 日放送）があり、その時に Chat GPT も取り挙げられていました。お二人の一致した結論として、「“Chat GPT”の出現で作家という仕事はいずれなくなる」ということがありましたが、筆者はそうは思いませんでした。なぜなら、現在の Chat GPT は、創造的仕事は苦手だからです。また、仮に小説にしたい材料を提供しても、個性的なものはでき上ってこないでしょう。だからこそ、人の手で創作することに意味があり、面白さもあると思うのですが如何でしょうか？

もしかしたら、近いうちに、AI と人類の戦いが生まれてくるのではないか、という危惧はあります。筆者は幸か不幸かそのような時代にはもはや生きながらえてはいないだろうとは思うのですが。

DX やら GX 横文字だらけの この日常
かそけき和語は どこへ行くのか
（安原一哉，代表理事）